

# 胃癌肝転移に対する外科的切除の長期成績に関する多施設共同研究

Kinoshita T, Kinoshita T, Saiura A, et al. Multicentre analysis of long-term outcome after surgical resection for gastric cancer liver metastases. Br J Surg .2015 ; 102: 102-107.

科長

木下敬弘

Takahiro KINOSHITA

国立がん研究センター東病院胃外科

## ▶背景

大腸癌肝転移に対する肝切除は根治を見込める治療として広く認知されているが、胃癌肝転移に対する肝切除の意義に関しては議論が多い。これは胃癌の生物学的悪性度の高さや heterogeneity を示すとともに、胃癌肝転移は他の転移巣を伴う場合が多いためと考えられる。臨床的に切除可能な胃癌肝転移はまれであるが、日本では以前から同時性・異時性を問わず適応を絞って肝切除を行う施設があり、少数例の報告が散見されてきた。疾患の希少性から、今後も大規模な前向きランダム化試験を行うのは非現実的である。本研究では日本のがん専門5施設でこれまで蓄積されてきたデータを基に、後方視ではあるが比較的大規模な症例群に対する長期予後解析を行なった。

## ▶対象と方法

1990年から2010年の期間に、R0切除が行われた同時性・異時性胃癌肝転移切除例を対象とした。5施設のデータは新たに共通データベースに登録され、長期成績・予後因子に関する解析が行われた。この期間の手術適応は多少の変遷があるものの5施設で類似しており、①肝転移数が3個以下、②胃原発巣の根治切除が可能あるいは既に施行、③他に非

切除因子がない、であった。生存曲線はKaplan-Meier法、log rank testを用いて解析し、予後因子解析はcox比例ハザードモデルを用いて行なった。

## ▶結果

計256症例(同時性/異時性=106/150)が解析された。切除肝転移巣の平均個数は $2.0 \pm 2.4$ であった。Grade III以上の合併症率は10.9%、手術関連死亡率は1.6%であった。観察期間中央値65ヵ月(1-261)で、再発を192例(75%)に認めた。肝切除から再発までの期間中央値は7ヵ月(1-72)であり、再発形式としては肝再発が72.4%と最も多く、再肝切除は14.4%に行われた。1,3,5年全生存率(OS)・生存期間中央値(MST)は77.3, 41.9, 31.1%・31.1ヵ月、1,3,5年無再発生存率(RFS)・MSTは43.6, 32.4, 30.1%・9.4ヵ月であり、いずれも同時性・異時性で差はなかった。(図1)。予後因子に関する多変量解析では、原発巣(胃)の漿膜浸潤(hazard ratio(HR) 1.50;  $P=0.012$ )、肝転移3個以上(HR2.33;  $P<0.001$ )、肝転移最大径5cm以上(HR1.62;  $P=0.005$ )の3項目が予後不良因子として抽出された。この3項目を有する数で生存曲線を層別化したところ各々で有意な差が認められた(図2)。